

## 第二部 パネルディスカッション

### 女性の貧困化に社会はどう立ち向かうのか

パネリスト：

カトリーヌ・シモン (ル・モンド記者)

いちむらみさこ (ホームレス・アーティスト)

ソフィ・ポンティウ (国立統計経済研究所 エコノミスト)

大沢 真理 (東京大学教授)

司会：

中嶋 公子 (日仏女性研究学会)

ダヴィッド=アントワヌ・マリナス (日仏会館特別研究員)

中嶋 それでは、第二部のターブル  
ロンドを始めたいと思います。今まで  
非常に活発に、内容的にもかなり実の  
ある実質的な議論に入ってきていると  
思います。今日は多くの皆さんがご参  
加くださいます、私ども主催する側  
としては本当にうれしく思っております。

本日、旧労働省で男女雇用機会均等  
法を担当され、その後、文部大臣もさ  
れました赤松良子さんがいらっしゃっ  
ています。もうお帰りになるというこ  
とですので、私どもに一言だけエール  
を送っていただいて始めたいと思いま  
す。

赤松 赤松でございます。皆様方が  
お話しになる前に邪魔をしてすみませ  
ん。去年もやはり3月8日でしたか、  
去年はボーヴォワール生誕100年とい  
うことでここへ参りまして、私はボー  
ヴォワールの娘であると宣言したわけ  
でございます。ボーヴォワールの娘と  
いうのは世界じゅうにいっぱいいるわ  
けで、彼女は子どもをお産みにならな  
かった方ですが、それだけたくさん自  
称の娘がいるというのはすばらしいこ  
とだと思って、私もその中の一人にと。  
フランスからガスパールさんとか、も  
う1人ぐらい来ておられましたよね。  
みんな自分もそうだと言うので、じゃ  
あ私たちはシスターだと思って——フ  
ランス語は・・・soeur というのかな、  
難しい発音ですが——大変うれしゅう  
ございました。今年もまたあるという  
ので、日仏会館は International  
Women's Day にとてもご熱心なところ  
だという認識をいたしまして、途中で  
失礼ですけれどもとにかく参加をさせ

ていただきました。今日はありがとう  
ございました。(拍手)

## 日本の貧困・ホームレスとNGO

中嶋 それでは、第二部をこれから  
始めたいと思います。第一部で、統計  
のとり方等々かなり質問と議論が出て  
きております。第二部では、お互いの  
中で質問し合って議論をしていただき  
ます。第二部の目的というのは展望を  
見出すことです。これまでの皆様のご  
発言の中にも少しずつ入ってありまし  
たが、社会が、私たちが女性の貧困化  
にどう立ち向かうのかという展望を一  
言ずつ皆様に報告していただいて、ま  
とめにしたいと思っております。

さきほどシモンさんから出された質  
問で、日本の貧困やホームレスの人た  
ちに対するNGOというのはどの程度  
に機能しているのか、そういう組織が  
あるのかどうかというのがありました。  
大沢さん、ないしはいちむらさん、昨  
年の9月28日にできた「女性と貧困ネ  
ットワーク」、それこそが一つの組織で  
はないかと思いますが、ちょっと説明  
していただけますか。

いちむら ホームレスを支援する団  
体はたくさんあります。具体的に生活、  
食べることとか、医療相談をされてい  
るところも多くあります。ただ、都市  
部に固まっているので、それを目がけ  
て、地方でホームレスになった人たち  
が東京とか大阪とか名古屋に行くこ  
とが多い。そのために、1日1食ですけ  
れど、私の友人たちも毎日ご飯を食べ  
られると。かといって同じところで毎  
日やっていないので、東京の中でも例

えば月曜日は銀座、火曜日はどこどこ、水曜日は上野、木曜日は渋谷などあちこち回るわけです。3時間ぐらい歩いて回ったりしています。先ほどご紹介しましたように、「女性と貧困ネットワーク」というのを立ち上げました。そこでは女性の貧困を見えるようにしようという活動をしています。今やっているのはいろんな場所で、「貧乏カフェ」と言ってるんですけども、だれでも無料で来られるような相談カフェを開いています。

**中嶋** ありがとうございます。そうですね。では赤石さん、もっと具体的に説明してもらえますか。

(当日、ご参加くださった「シングル・マザーフォーラム」の赤石さんにフロアから発言していただいた。)

**赤石** ホームレスを支援する組織ですか。

**中嶋** ホームレスの人とは限らず、貧困に陥って生活が立ち行かなくなったという層も含めてということだと思います。

**赤石** 「反貧困ネット(ワーク)」という、これは女性だけではなくて広く貧困問題に取り組むネットワークとして2007年10月ぐらいにできたんですけども、そこでは今は有名になってしまった「自立生活サポートセンター・もやい」の湯浅誠さんが事務局長で、生活相談とか保証人事業、ホームレスの総合相談をやっています。あと生活保護についてのいろんな取り組みをしている団体とか。「シングルマザーズ・フォーラム」というのは私のももとの団体ですけども、そこも入っていますし、「DPI(日本会議)」と

いう障害者の団体も入っていますし、もともと路上生活の人たちの事業をやっている「あうん」というのはリサイクルショップなどを経営しています。

「反貧困ネットワーク」のホームページ、ウェブサイトを見ていただくと、かなり幅広い人たちがいろんな支援を行っているというのが大体見えてくるのではないかと思います。女性に特化してという質問ではなかったんですよ。

**中嶋** シモンさん、日本のNGOの団体については、女性ということですか、それとも男性も含めてということですか。

**シモン** 私はフランスから参りました日本をよく知らなかったものですから、私がお聞きしたかったのは、市民社会と呼ばれるものが、国との関係からみて、どのような活動をしているか、ということでした。もう既に回答はいただきました。ありがとうございます。ただ一つ細かい点ですが、活動資金はどうなっているんですか。フランスはNGOといいますと、大体自分で何とか資金調達をしてくるんです。国から委託された事業を実施することもあります。資金は自分で何とかします。省庁の予算に計上された援助ではありません。日本では、この種の情報は容易には入手できないこともあるでしょうが、NGOは国の援助を得ているんでしょうか、それともNGOはそういう援助なしで運営されているのでしょうか。

**赤石** 国からの援助はほとんどないです。非常にわずかな資金と献身的な努力でNGOが運営されていると思い

ます。

## 日本の大きな男女の格差——賃金差別、最低賃金、無償労働

**中嶋** それでは、パネリストの方々、お互いの中でもう少しほかの方に質問をしてみたいということがありましたら、お願いします。大沢さんはフランスに関しまして何か質問はございませんか。

**大沢** 質問といたしますか感想ですけれど、ポンティウさんが男女の賃金格差についてお話しくださしまして、月収だと25%の格差、時給だと11%の格差とおっしゃいました。日本から見ると大変うらやましい小さい格差です。日本では時給に換算した格差でも30%を超えておりまして、特に近年改善していないようなことで——改善していないのはフランスも同じようですが、それが一つのコメントです。

もう一つ、私は今日は家事のお話をしなかったんですけれども、従来から関心を持っています。家事といっても何をやっているかというのはよくわからないんですけれども、80年代の日本でのある調査によりますと、男性が挙げた「私は家事をしている」という自身の最も高かったものは「朝、新聞をとる」です。これはフランスでは家事と考えられているのか、いないのか（笑）。質問というか、もうジョークみたいな世界ですけれども、そういうような事情が日本はありまして、韓国の男性に比べても日本の男性は家事をしておらず、この10数年間、家事をやっている比率も時間もほとんどふえてい

ないという状況です。

**中嶋** ありがとうございます。日本の場合は、基本的に認識しておかなければいけないと思うのが、同一労働同一賃金とかの原則があるとはいえない……。大沢さん、その辺を説明していただけますか。フランスのほうは同一労働同一賃金がある程度保障されていると思いますし、最低賃金も保障されていると思います。日本は、ILOの条約を批准しているとは言えない状況なのではないでしょうか。日本が労働条件において、男性も含めていかにひどい国かということはあるのではないかと思いますので、いかがでしょうか。

**大沢** ILO100号条約、同一価値労働についての同一賃金の条約ですけれど、日本は批准しています。

**中嶋** していますか。

**大沢** しています。しかし賃金格差があるということに関して日本は、ILOからも、国連のCSW(Commission on the Status of Women)などでも、しばしば質問を受けています。日本政府は何と答えているかというと、男性の間でも同じ仕事をしていて同じ賃金になるわけではない。早く会社に入った年配の人は高い賃金になっている。そういう賃金構造である以上、つまりジョブ(職務)に対する賃金になっていない以上、同一賃金というのは実現しがたいと答えているわけです。最低賃金制度は日本にももちろんありますけれども、恐らくOECD諸国の中で最も低いレベルの最低賃金です。この最低賃金で働いて生活保護基準の収入を得ようと思ったら、1週間に60時間以上働かなければなりません。

中嶋 ありがとうございます。ポンティウさん、何か質問はございますか。

ポンティウ 質問はありませんが、日本の賃金格差について一つ申し上げたいと思います。確かに大半のEUの国々の格差と比べて非常に大きいと思います。EUの中でフランスは時給の賃金格差が最も小さい国というわけではないと思いますが、フランスのような賃金平等にすでにかなり強い関心を払っている国では格差をこれ以上縮めるのは難しいのではないかと思います。非常に多くの平等促進のための法律があるからです。「同一労働、同一賃金」ということで、少なくとも書類上は男女の平等を実施しようということはかなり行われています。ただ、フランスの問題は同じ仕事での不平等ということではなくて、男性と女性が同じ雇用を得られない、同じ職務につけないという、そこに大きな不平等があるわけです。しかし、職務ひとつひとつについてはその条件は同じであり、男女の賃金格差といったものはありません。

それから、大沢先生がおっしゃいましたように、最低賃金が存在し、そのレベルがどういうものかということも格差解消に非常に重要だと思います。これは男女格差、あるいは男性の間、女性の間であったとしても同じことだと思います。最低賃金というのは、その名前が示しているように、賃金がそれ以下のレベルにならないように保障するものです。ですから、最低賃金が全体の賃金に対して適切なレベルに定められていれば、もちろんそのほうが男女の不平等がなくなるわけです。しかしながら一般的な賃金の格差が大き

ければ、やはりそれだけ男女の格差も大きくなります。これはほとんどすべての国で見られる現象ですが、日本のように時給で30%の賃金格差が男女の間にあるということは記録的に大きなものだと思います。

## オルタナティブとしての路上の文化

中嶋 フランスの現状を聞いて、何かご質問があったらどうぞ。

いちむら 私のイメージだったんですけれども、フランスのホームレスを題材にした映画とか、アニエス・ヴァルダさんの『落穂拾い』とかすごく面白いなと思って見ていました。フランスは本当に貧困に文化があって、これはすばらしいと、今日はすごく楽しみにして来ました。支援層も厚く、積極的な面白い支援というか、社会に対して挑戦的な支援もなされているということが想像できたんです。

ちょっと気になるのが、貧困の話になるとやっぱり労働の話になってくると思うんです。今のお話を聞いていても、男並みに働くということが、女の人が不利になっていたり、日本の場合でも、働いても働いても豊かにならないとか、逆にキャリアが上がれば過労死してしまうぐらいの責任が降りかかってくるとか、私にはどうもそう思えます。私は大体、そういうところで働く気は全然なくて、労働について聞けば聞くほど嫌になる。

私はかってワーキングプアと呼ばれるレベルの収入だったんですけれども、そこと社会保障みたいなものが変わら

ないんだつたらと、もう絶望していました。そんな時出会ったホームレスの生活では余ったものをとにかく使っていこうということでした。世の中、とにかく余ったものが大量に放出されているわけです。男並みに働こうとする人たちと男並みに働いている人が、消費と生産ですごいいっぱい物を放出していくわけです。そこで何だ、何だ、こんないっぱい物が余ってるじゃないかとホームレスの人たちがそれらをわけあいコミュニティーをつくって、すごいいいものも着られちゃうし、おいしいものも食べられちゃうという暮らしが、すごく私は可能性があると思っているんです。

私が住んでいるところではなくて、世界中では食料難とか言われています。けれども、都市部では食べ物とかもいっぱい余っているようですので、それをまず有効に使うことを考えて、それから足りない分は金を精算するみたいなほうが、……。

例えばいまの年金とか社会保障ももちろん悪いんですけども、そもそも無年金の女性もいっぱいいるんです。そういう人たちには届かない。じゃあ違うこちらの保障がある、それでもだめならあちらの保障があると点々とたらい回しにされてしまう人がたくさんいて、多様な文化と言われていればいるほど社会の構造が全然追いついてない。社会構造自体が、人々、市民の暮らしをつくっていくという、そこはもう、多文化と言えは言うほどだんだんそういうことではなくなっているような。自分たちでやっている、自分たちで築き上げている、地に足をつけ

て生活をしている人たちから、社会保障とかそういうものを政府や市民団体は学んでいったほうがいいんじゃないかと思います。

あと、貧しいからといってよくないと言うよりも、貧しくても安全で安心できるのんびりした暮らしというのは大いにあり得る話で、そこを目指していったほうがいいんじゃないかと思っています。

**シモン** いちむらさんのお話はほんとにすばらしいと思います。いま提案なさったこと、いちむらさんのイニシアチブはすばらしいと思います。ぜひフランスに来ていただいて、ご自分の経験、これまでになかったまったく新しい経験だと思いますが、そうしたことをお話しいただきたいと思います。私は何が何でもフランスがいいとは思っていません。確かにフランスにもいいところがありますけれども、日本にもすばらしいことがある、今ご紹介のあったご経験はすばらしいですね。特に「貧乏カフェ」、そして貧困の人々に見えるものにするということ、それは重要だと思います。私がジャーナリストだからそう思うのだろうと思いますが。ジャーナリストというのは、社会についての一つのイメージを提示します。それがジャーナリストの主な仕事です。ジャーナリストは情報を提供するのですが、それはまた社会の一つのイメージであり、見方です。

フランスに帰ったらアニエス・ヴァルダに言おうと思います。あなたの『落穂拾い』を見た女性が日本にいと。サンドリーヌ・ボネールが主演した『冬の旅』、これはもっと古い映画ですが、

私の報告でこの映画について話してもよかったですね。ヴァルダはほかにも映画を沢山撮っています。こうした不安定な生活や貧困のテーマをよく扱っています。それから気がつくのは、失業者とそうでない人の明確な境界がつけにくいことです。統計上はできるのですが、現実にはそう簡単ではない。例えば働いている人の統計です。フランスでは仕事をしているけれども、申告給与のない、もぐりの労働者が大勢います。統計には出て来ません。しかし実際には存在していて、私たちもそういう人々を目にするわけです。家事手伝いの女性にもそういう人がいます。

私はル・モンドの記者ですが、ル・モンドの本社が新しく建設された時に、その建築現場で働いていた人の中にも何人かの非合法労働者がいて、私たちジャーナリスト自身がそういう労働者についての記事を書きました。そういう現状の告発を行ったのです。結局この問題は、大変でしたが、全員にとって満足できる形で解決をしました。これはフランスではよくあることです。

実際に、日本に来て、私も路上生活をする女性たちに出会ったのですが、彼女たち自身働いています。すばらしい女性たちです。いちむらさんが話されたこの労働についての考え方は考察に値すると思います。先ほど家事労働の話が出ました。家事労働も無報酬です。しかし労働に違いありません。だから男性はしない。あまりおもしろい仕事ではない、報酬さえない。

いろいろ私の頭に浮かんできたことをこうしてお話しさせていただきました

た。影と光の部分があり、タブーもありそれについては考察する必要がありますが、私は活力のある日本の社会を発見できて本当にうれしく思います。今回来日して日本を発見できたことをうれしく思います。ありがとうございました。

## ホームレスとジェンダー

中嶋 司会のマリナスさんが皆さんに質問があるということで、マリナスさんは、ジェンダーというわけではないけれど、日本とフランスの最貧困層の比較の研究をされています。

マリナス 女性ばかりのこのパネルディスカッションで、私は男ですから、ここではまったくのマイノリティを代表しています。そういうことは私にとって初めての経験です。さて本題に戻りますが、今日のシンポジウムの特徴は、男女間の不平等について語るだけでなく貧困の問題も扱っているという点です。私はフィールドワークを続ける中で本当に貧しい人々、ホームレスの人たちに会いました。その中に女性はとても少なかったのです。そこで論争を醸すかもしれませんが、質問をしたいと思います。

不平等の問題から貧困の問題へと移行をすると、男女で逆の効果があるのではないか。女性の方が優遇されるという逆の効果があるのではないかと思います。とくに日本のことを考えると福祉予算は少ないけれども、女性に対してはかなり福祉の施策がある。つまり不安定な状況にある女性でも、路上に長くいることがなく、宿泊所に収容

されたり、あるいは公的な援助が得られなかったりするという仕組みがあると思います。男性のほうはむしろ自立していなければならない、自分で収入を得なければいけないとされるから、逆に差別されているような気がします。私がこういう質問をしたかったのは、いま貧困は社会のマージンの部分だけではなく、かつては貧困とは縁のなかった中流階級にも貧困が広がっているような気がするんですが、そういう中で、今申しあげたことがどういう影響をもたらすことになるのかを考えたかったからです。

**シモン** ご指摘の点について、一つの見方をお示しできるかもしれません。私は最近、女性の路上生活者のための緊急宿泊所でルポルタージュをしました。（「エマウス」という団体の施設です。）フランスでは子どものいない女性一人だけの場合と子どもがいる女性とは区別をします。私がルポルタージュをした宿泊所では、子どもがいる女性しか受け入れてもらえませんでした。夫とかパートナーがいてもいいのですが、それは二次的なことで、子どもがいるかどうかを受け入れの基準になっていました。子どものいない女性は宿泊所に入れてもらえなかったのです。ですから女性たちへの差別だけではない。男性のほうは子どもを連れていけば、そういうケースはまれですが、その宿泊所に収容してもらえます。女性の間でも差別がある。女性に子どもがいるかどうかで差別があるということに気がつきました。

私はルポルタージュにも書きましたが、その宿泊所で働いている女性の一

人が、若い女性の路上生活者から暴力を受けたのです。それは自分の子どもを痛ましい状況の中で亡くした女性のホームレスでした。この女性が「エマウス」のセンターに自分の連れ合い、亡くなった子どもの父親ですが、この男性と一緒にいったのです。前に子どもを連れて行ったことがあったからです。しかし今回は子ども連れでなかったのです。宿泊所に入れてもらえませんでした。そこで暴力行為に出たのです。彼女には入れてもらえないことが理解できなかったのです。マリナスさんの指摘はその通りだと思います。

それと同時に路上生活をする女性はフランスでも日本でもまず性的な暴力を受けたり、レイプされたりする危険があります。そうした点で、女性の方が男性よりもはるかに弱い立場にある。ですから括弧つきの差別ではありますが、そういう差別があるとしても理解はできます。男性のほうは恐らくレイプされる可能性が少ないでしょう。女性のほうがレイプされる危険がずっと大きいから保護すべきである。その上子どももいたとすると、役割分担ということになります。だから男性のホームレスは子どもの面倒は、母親にくらべたら、見ない。

いわばドミノゲームのようなものがあって、こうやってバランスをとったり、バランスが崩れたりしていくんだと思います。ですから、男性に対してのみの差別ではないと思います。あるいは全体の図式を描くべきです。そうするとパリで女性が路上生活をするリスクが違います。また戦争でもそうです。戦争があれば女性がレイプされ

るのは世界中どこでも見られる現象です。この点においては、はっきりとしたジェンダーの違いがあるでしょう。女性の扱われ方に違いがあるのは、私から見れば明白です。でも差別という言葉は私は使おうとは思いません。

## 長期化する貧困・追いつかない対策 ——フランス

**ポンティウ** 補足ですけれども、いまシモンさんは差別という言葉に対して留保をつけられましたが、正しいと思います。私も極貧の専門家ではありませんが、フランスにはかなり昔から若者向けのホームレス援助のシステムがあります。路上生活をするのは若者だったからです。女性のための宿泊所はほとんどなかったのですが、ただ、子どものいる女性は特別でした。まず、子どもを受け入れるという構造があり、子どもはやはり女性と一緒にいることが多いから、女性向けの宿泊所ということになったのです。フランスの浮浪者のイメージは伝統的には男性です。女性のほうはより最近の現象ですし、目につきません。ベロニック・ムージャンやシルヴィー・セルリエの研究で分かりますけれども、女性のホームレスは路上生活をしていることを表には出さないのです。ベンチに座っていますが、化粧もして、服装も整え…。ですから、路上生活を始めてしばらく時間がたって、初めて女性がだんだん、例えばアルコール中毒になったり、麻薬中毒になったりして様子が悪くなっていくのです。

そして路上にいる人々に関してもう

ひとつ別の問題があります。貧困や不安定性の問題とは少し別の問題です。路上生活は特別であります。路上生活でいま特殊なことは若い人がふえてきていることです。若い人たちは特別です。この少年たちは女性たちと同じ危険にさらされてはいません。逆に宿泊所に行くことはほとんどしません。普通フランスの路上生活者たちは、宿泊所はいろいろ拘束が多く、疲れるのでまったく行きたがりません。荷物をそこに置いておくこともできないのです。昼間は閉めてしまうので、朝5時、6時には宿泊所から出て行かなければいけないです。荷物を持って出て行き、毎日毎日またその晩の宿を探さなければいけないのです。本当に疲れる生活です。また宿泊所の混雑や、暴力にたいしても批判があります。ペットを連れて泊まれないという点もあります。しばしばフランスのホームレスは犬を飼っていますが、宿泊所に連れていけないのです。

メディアは毎年冬になるとよく「なぜこうした人たちが宿泊所に行かないのか」と驚いてみせます。そして毎冬、怒ったり不思議がったりして「そうした人たちを強制的に力づくで宿泊所に連れていくべきかどうか」という議論が始まるのです。しかし根本的な問題は「どういうタイプの宿泊所を提供するのか」、「なぜホームレスの人たちは路上生活のほうが好きなのか、なぜ宿泊所に行くよりも凍死するほうを選ぶのか」ということだと思います。

**シモン** 今おっしゃったことは正しいと思います。2008年から2009年にかけて、今年の冬、フランスではこれ

までになかったことですが、メディアがこうした宿泊所はひどいところだと明白に言いました。そうしたホームレス宿泊所についてのルポは随分前からやっています。ホームレスのための宿泊所は、狭いところに大勢の人が押し込まれて、暴力があつて不潔であつて、荷物を置いておくこともできないといったことが言われていました。しかしこの冬初めて、メディアでそういうことが言われるのを私は聞きました。別の文脈であります、旧ユーゴスラビアの戦争のときは随分、虐殺についての記事が出ました。なぜだかわからないけれど、ある日初めてそれを耳にしたんです。メディアが問題にするのを聞いたのです。それがスプレニカでした。そしてこれはひどいと人々が言い始めたのです。その前に既にルポルタージュがいっぱい出ていたのに、それが伝わっていませんでした。だから現場では「こういう話は誰も興味をもたないんだね」と言い合っていました。

フランスで起きていることに恐らく人々が気をつけて耳を傾けるようになったように思えます。つまり、こうしたホームレスの人たちの声が報道されるようになってきた。「あまりひどいところだから、宿泊所にいられない」という声です。その反面、それへの反応として、初めてはっきりとしたやり方で、「こうした人たちは強制的に収容すべきだ」という声が聞こえてきました。そこで今議論が起きています。これは新しいことです。

フランスの問題をひとつお話したあとで、その関連で日本のことに戻りたいと思います。ルポルタージュをして

分かったのですが、今、人々は前よりも路上生活を長く続けるようになりました。特に女性がそうです。以前には宿泊所に女性が1週間、2週間、3週間、6週間とか宿泊していたとすると、その期間が今はもっと長くなっています。つまり、そうした女性たちは長期失業、長期的な貧困に陥っているのだということが分かります。そこで問題として出てくることは、そのような人々に対してどのような医療的ケアを提供するのかということです。貧困が構造的となった時代に私たちはいます。貧困が社会に居座っているのです。不安定な生活をしている人々という言い方をしていた時代はもう終わりました。この不安定な生活をする人々という言い方はもうしません。貧しい人は貧しいというだけのことです。パリでホームレスがテントを張ると、テントが撤去されます。貧しい人々を見たくないからなのです。ところがそういう人々を見たくないといつても、貧しい人々は貧しいままそこにいます。パラドックスですね。フランスの場合、まだ解決策が見つかっていません。しかし、いま問題提起がされています。路上生活をしていて貧困の場合、死亡率が高い。そして若死にをする、病気になりやすい、性生活がないというような、いろいろ特殊な問題があり、複雑だったりします。いろいろなことが起きていて、そうしたことはこれまでなかったことでした。

日本では調査が行なわれていて何か言われているのかどうか、ルポルタージュがあるのかどうか知りませんが、貧困が長く続くようになりましてけれど

も、とりわけ貧困の女性たちに対して、そして貧しい人々に対して社会がどのような反応を示しているのか、日本ではいかがでしょうか。

## 隠される日本の貧困

### ——女性と子どもの貧しさ

**中嶋** 大沢さん、今のシモンさんの貧困に対する日本の社会全体の反応、市民社会の反応について、なにかございますか。

**大沢** 社会の反応は、最近さまざまメディアに貧困問題が取り上げられるということもあって、少しずつ知られてきています。貧困が問題だと思われていると思います。しかしながら、やはりいつも政府が問題なんです。日本政府は日本の貧困率がOECD諸国の中でも最も高いというような事実を認めていません。2007年の春先の国会で、OECDのレポートに基づいて共産党委員長の志位和夫さんが当時の安倍晋三首相に質問をしました。安倍首相がどう答えたかという、こういう外国の機関は日本の統計を必ずしもきちんと扱っているとは限らないので、信用性がないというように答えています。

厚生労働省も、やはり日本には貧困はないという立場のままで推移しているように思います。というのは、日本では政府統計に研究者がアクセスすることに非常に高いハードルがあります。その統計をどう利用したいかという理由を書く欄に、貧困の分析をしたいと書いたら断られたというようなことも、最近のニュースとして聞いてい

ます。幸いなことに4月から統計をめぐる法律が変わりますので、今までよりはもっともっと研究しやすくなると思っています。

最後に申し上げたいのが、お金はなくても豊かな生活、ないし「ボロは着てても心は錦」、そういう言説というのは当然あるわけです。私が接する範囲の中では、保守的な人々がそういうことをおっしゃることが多い。貧困といっても、これは相対的な貧困概念、つまり社会の中でちょうど真ん中の所得の50%未満ということで、OECDは基準にしています。ちなみにヨーロッパ連合の基準は60%のところにとられています。真ん中の人の50%未満であっても、真ん中自体がそもそも高ければ貧困だといっても大したことがないんじゃないかと。これはあらゆるところで聞く意見ですが、では、それを日本の公式的な貧困線である生活保護基準と比べるとどうなのか。ほぼぴったり一致します。政府が公認の貧困ラインとして認めている生活保護基準とほぼ一致しますので、やはりそれは問題だということになるかと思えます。

もう一つ言うと、所得が少なくても、その所得をうまくやりくりしてきちんと生活のニーズが満たされていけばよいではないか。このような考えで、所得ではなくて相対的剥奪 (relative deprivation) という概念で生活を調査する手法があります。その結果は、所得が低いとデプリベーションも深く、しかも多次元的になるということがわかってきています。

特に子どもですね。この調査をするときに、子どもあるいは普通の人と並

みに生活をして今後も暮らしが成り立っていくためには、どういったものが最低限必要かというのを尋ねます。そうすると、日本では子どもにとってどうしても不可欠なものという答えが返ってくる項目が、イギリスやヨーロッパの国と比べて圧倒的に少ないんですよ。例えば誕生日やクリスマスに、ささやかだけれどもパーティーをしてプレゼントをもらうというのは、これはヨーロッパ、欧米の国では子どもにとって欠かせないというふうに大多数が回答するわけですが、日本ではマルがつかないんです。

子どもにとって不可欠なものやチャンス、友達の家と行き来をしたり、あるいは親戚とコミュニケーションをしたりというようなことが、どうしても必要だと大多数が答える項目が、極端に日本は少ないんです。その上でそのような項目が、お金がないために満たされていないという回答もかなり高くなっています。そういう意味でも、生活の中でさまざまなチャンスや資源を奪われているという状況の代理指標として、所得貧困はこれからも使っていくべきだと思っています。

## 女性の貧困化：社会は何をすべきか

中嶋 ありがとうございます。もう予定の時間を過ぎてしまいましたので、最後に一言ずつ、2分ずつぐらいでこれからの展望についてお話しいただきたいと思います。ずっと貧困というのはあったんだと思います。でも、いまここで初めてみんなの意識の中に貧困の構造化がはっきりと認識されてきた

のだと思います。このことに対して、私たちはとりわけジェンダーという視点から今回のシンポジウムを組織しているわけですが、女性の貧困化に対して今後どのような展望といたしますか、解決策があるのでしょうか。これは、最後のセッションのタイトルでもあります。社会は女性の貧困化に対してどう立ち向かうのかということに関して一言ずつお話ししていただければと思います。まず、ポンティウさん、いいですか。

ポンティウ 今の女性の貧困という問題が構造的になってきているかということに、私は必ずしも賛同しないかもしれません。しかし、女性の貧困というのは、可視化されてきたとまでは言えませんが、ますます現実になってきているとは言えます。フランスでは、なによりもそれは家族構成が変わってきてからです。理由は離婚とかいろいろあるかもしれませんが、女性のひとり暮らしが増えて、女性の貧困が顕在化するようになってきているわけです。「貧困の女性化」というとき、そこでは家族や世帯が崩壊してきているのではないのでしょうか。ヨーロッパ諸国で「貧困の女性化」というときには、裏に家族の問題があると思います。

では、このように貧困が女性の間で高まっていることに関してどんな対応ができるのか。これはやはり雇用だと思います。もちろん雇用によって貧困が抑えられるということではありませんよ、ワーキングプアの問題がありますから。しかしながら、どこの国であろうと職を持っている人たちというのは、やはり平均的に仕事がない人より

も貧困の度合いが少ない。これは何と  
いっても否定し得ないことでありまし  
ょう。

もう一点、この20年、30年で変わ  
ってきた点を挙げれば、伝統的に貧困  
者というのは主に高齢者が多かったわ  
けです。ところが最近変わってきたの  
は、多くの高齢者たちが年金を得られ  
るようになったとかいろいろ社会保障  
が普及してくるようになって、高齢者  
が貧困であるというよりも、むしろ逆  
に働き手の年齢層のほうが貧困化して  
きています。こうしたことが背景にあ  
ります。

はっきりとした男女の不平等に関す  
る問題に加えて、女性のほうに不安定  
雇用も多く、貧困のリスクも高いとい  
うこともあります。貧困への道という  
のは男性と女性では違います。男性は  
失業によるものが多いでしょうし、女  
性の場合は家族の危機や離婚などによ  
るでしょう。女性は、仕事をしていな  
くても、収入の少ないパートタイムの  
仕事しかしていても、収入のある  
パートナーと一緒にくらしているうち  
はいいのですが、あるとき突然、何か  
らの理由で配偶者と一緒に暮らせなく  
なると、その女性は大変に貧困な状態  
に落ち込んでしまうわけです。

雇用はセーフガード、保障になりま  
す。短期的な保障になるだけではあり  
ません。雇用というのは高齢になった  
ときに年金も保障するからです。ある  
程度高齢者になったとき、仕事をして  
こなかった女性にとって給与よりも年  
金の不平等のほうが、フランスでは数  
段深刻です。ですから、女性に雇用を  
保証することが大事だと思います。収

入のある仕事につき、女性が仕事か子  
どもかを選ばずにすむ保育システムを  
整える。そういった方策がとられなく  
てはいけないと思っております。あり  
がとうございました。

中嶋 それでは大沢さん、お願いいた  
します。

大沢 私はほとんど言い残したことは  
なく、最初の報告の中で今後の対策  
も言わせていただきましたが、1点だ  
け補足するとすれば再び母子世帯問  
題です。日本の母子世帯では働いてい  
るほうが貧困率が高いと申しました。日  
本の母子世帯の就業率は85%以上で  
す。ほとんど先進国でというか、世界  
で最も就業率が高いのが日本の母子世  
帯だと思います。ポンティウさんは、  
フランスも母子世帯は貧しいが、それ  
は働いてないからだとおっしゃったん  
ですが、日本は全く違う状況です。こ  
れは何とかしなくてはいけなくて、そ  
のためには母子世帯にターゲット化し  
た政策というよりも、もっと抜本的に  
税制であれ社会保障の体系であれ、変  
えていく必要があると思っております。

中嶋 ありがとうございます。いち  
むらさん、お願いいたします。

いちむら 私の周りのお金をあまり  
持っていない人たちは、子どもの頃か  
らお金を持っていない。戦後の貧困か  
ら高度成長期、さらに経済大国になっ  
ても、やはり様々な問題はお金がない  
こと。そして女性はもともと貧困だっ  
たと、まさにそのとおりで、私の周り  
の人たちは、生まれたときからずっと  
貧乏。その人たちが何度も社会保障み  
たいなものを受けて自立自立とたたか  
れてやっているんだけど、やっぱ

り貧困になるという現状は実際にある。景気が良いとき悪いときがあるんでしょうけど、ホームレスの社会は、男性が多くて女性が少ないです。さっきも言いましたように、例えば、男性が過剰に賃労働している社会のように、男性が頑張っている社会のように、男性も女性も同じように頑張ったとしても、女性のホームレス、更に過労死が増えるだけみたいなふうに、ちょっと感じたんです。ホームレスになっても暴力を受けるとか排除されるとか、そういうことはあっちゃいけないし、ホームレスであってもそうじゃなくてもいのちを尊重されなければならぬ。そこそこ世の中が変わっても貧困はなくなるのだから、管理にたよらず信頼関係を持って安全を築いていき、女性や貧困の文化をもっともっと生み出していかなければと思います。

**中嶋** では、シモンさん、お願いいたします。

**シモン** 私はかなり話しましたので、最後に一言。メディアの役割について、言いたいと思います。メディア、ジャーナリストは、世論の作り手たちは、もっと強い決意をもって、貧困者たち、とくに女性の貧困者たちを闇のなかに放置することは決してしない、明るみに出していく努力を続けていかなければならないと思います。私もまたそうしていきたいと思っています。

**中嶋** みなさま、ありがとうございました。パネリストのみなさんの活発なご発言、問題提起のおかげで、第二部のテーマについてかなり深められた討論ができたかと思います。予定の時間を大幅に過ぎておりますので、あえ

てまとめることはいたしません。最後にもう一度、パネリストのみなさま、真摯なご発言を本当にありがとうございました。通訳の方々にお礼申し上げます。会場のみなさまも本日はありがとうございました。第二部はこれで終わります。